

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370259

研究課題名(和文)「人を結びつける文化」としての俳諧研究

研究課題名(英文) Study of Haikai as a Means of Communication

研究代表者

伊藤 善隆 (ITO, Yoshitaka)

立正大学・文学部・准教授

研究者番号：30287940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、俳諧が本来的に持っていた「人を結び付ける文化」としての機能に注目することで、俳諧の文化的な価値、俳諧資料の持つ多様性、について検討した。具体的には、「批点文化」・「伝書文化」・「手紙文化」の3つの視点に拠ることで、これまでの俳諧研究では重要視されていなかった点印や募句チラシ、伝書や書簡、人名録や俳人書簡の文例集などの諸資料を研究の俎上に載せることとなった。その結果、従来は評価の低かった月次句合が、地方の俳人と都市の宗匠を結びつける重要な機能を果たしていたとする見通しを得ることができた。このことによって、文化として俳諧を再検討する意義とその方法の定着が一步進んだと考えている。

研究成果の概要(英文)：In this research, I examined the cultural value and the diversity of haikai by paying attention to the haikai's function as a "culture linking people". So I researched documentary records of haikai. As a result I could make an inference that in edo-period local haiku-poets could made friends with haiku-masters in major cities by participating in monthly haiku events. This prospect will re-evaluate haiku in the late Edo-period.

研究分野：日本近世文学

キーワード：俳諧

1. 研究開始当初の背景

これまでの俳諧研究は、俳諧を「文学」として大成した芭蕉を中心に進展してきた。すなわち、芭蕉本人、さらには蕉風と蕉風復興期の俳諧が研究の主な対象とされ、享保期や幕末期に対する評価や感心は低い。

こうした芭蕉中心の研究に対する異議は、かなり以前から存在したが、現在でも研究状況にはあまり変化はない。これは「文学」的価値観を前提とする限り、作品や作者に対する新たな評価軸が設定できないためである。これまでどおり「文学」を重視している限り、これまでの研究で価値を置かれなかった資料の調査や翻刻は積極的に進めることができず、結果として研究が進展しない、という悪循環に陥っている。

2. 研究の目的

これに対し、本研究では「文学」的価値観だけではなく、「文化」的な価値観で俳諧史の諸相を明らかにし、俳諧を捉えなおすことを目的とした。すなわち、本来「座の文芸」として俳諧が持っていた性質に注目し、「人を結び付ける文化」として機能していた俳諧の価値、俳諧資料の多様性に目を向けることを目的とした。この視点は、江戸時代の文学や文化を理解する上で重要な視点であると考えられる。本研究の目的は、文化として俳諧を再検討する方法の確立と定着である。

3. 研究の方法

本研究では、この10年程の間に俳諧研究で起きた2つの大きな進展を踏まえることができる。1つは俳諧資料のデータベース化の進展であり、もう1つは点取俳諧研究の進展である。

データベース化の進展は、『元禄時代俳人大観』(八木書店、2011-2012)により、宝永4年以前の俳人の動向を網羅的に把握することが可能になったこと、さらに『古典俳文学大系』CD-ROM版(集英社、2004)によって、享保期以降の俳人の動向把握も比較的容易になったことが挙げられる。

また、点取俳諧研究の進展は、結果として大名俳諧資料の調査の深化、近世中期の点取俳諧のシステムの全貌の解明、につながっている。これによって、従来は殆ど研究の対象とはされていなかった点帖や点印、さらには点取俳諧の文化全般を研究の俎上に載せることが可能になってきている。

上記2点の進展は、これまでの俳諧研究では注目されていなかった多くの資料を分析し、文学史上に位置づけることが可能になったとことを意味する。

そこで、本研究では、「俳諧の批点文化」「俳諧の伝書文化」「俳諧の手紙文化」の大きく3つの文化的視点から、諸資料を検討し、調査研究を進めることとした。

まず、「俳諧の批点文化」については、点印、点帖、高点句集、募句チラシ、返草、

など、点取俳諧と月並俳諧に関する資料を検討した。これらの資料は、芭蕉が点取俳諧に対して否定的であったこと、明治期になって正岡子規が月次句合を否定したこと、等々の理由により、これまで積極的に俳諧研究の俎上に載せられてこなかった資料体である。

つぎに、「俳諧の伝書文化」については、その内容の是非の判断だけでなく、伝書の遣り取りの実態そのものの解明を優先した。すなわち、これまでの伝書研究では、その根底に、「それぞれの伝書が芭蕉の言説をどの程度忠実に伝えているか」という興味があり、俳論研究の一部として各伝書の内容が検討され、その結果により各伝書の優劣が判断されてきた。しかし、地方俳諧の実態解明に伝書は重要な資料となる。つまり、現地に残る伝書を追うことで、その地方にどの系統の俳諧がいつ頃入ってきたのかを明らかにできる場合がある。また、ある地域に伝えられた伝書群がその地域の俳人のアイデンティティの拠り所となっていたと考えられる事例もある。これが、内容の価値判断よりも、伝書の遣り取りの実態そのものの解明を優先した理由である。

さらに、「俳諧の手紙文化」については、とくに近世後期の俳人たちの手紙の遣り取りに注目した。彼らは、全国的規模で相互に交流するようになったが、その手段は手紙である。すなわち、従来の研究のように個々の俳人の伝記資料としての手紙に注目するだけでなく、俳人向けの手紙の文例集の刊行や、各地の俳人の人名録の刊行など、俳人の手紙に関係する諸事象を、「手紙文化」として調査研究の対象とした。

4. 研究成果

まず、「俳諧の批点文化」については、「出雲俳壇史の中の大社俳壇の人々」(いずも財団公開講座)に関わる調査の際に、手銭記念館に所蔵される暮句チラシの内容を検討したところ、京都の宗匠と出雲の俳人が月次句合によって関係を結んでいた事実を確認した。この問題は、「出雲俳壇史と大社俳壇」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』(いずも財団叢書・第5号、ただし2018年6月現在未刊、校正中)の内容に活かすことができた。さらに、「明治・大正期の点印 汽車や気球、喇叭や兵士の図案」(『太平余興』第一集)では、近世の点印と近代の点印の意匠を比較して報告した。具体的には、近代の点印には、飛行船や蒸気機関車、日章旗や兵士など、文芸とは不調和とも思われる図案を取り入れたものが存在することを取り上げ、和漢の詩歌や文物に基づく正当的な近世点取俳諧の点印の意匠とは対極的であること、また俳諧の文化的側面について考える際にはこうした資料も当時の人々の意識を考える上で見落とすことのできない存在であることを指摘した。

つぎに、「俳諧の伝書文化」については、出雲地方に伝わる伝書の翻刻を継続的に行った(「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書」(『湘北紀要』)他、近世中期の貞門系の伝書『執筆巻』、美濃派の雲裡坊の伝書である『答問書』についても翻刻を行った。また、伝書を読み解くことで見えてくる中興期俳人の俳諧学習の実態について検討した結果を、「大社の俳人にみる師弟関係 『岡崎日記』前後」(『日本文学』)として報告した。

さらに、「俳人の手紙文化」については、俳人の書簡文例集としての趣向を持つ俳書である梅左編『俳諧文章車』(天保十二刊)について調査検討を進め、「俳諧手鑑 ふぐるま集」に見る近世俳人の手紙文化」(『立正大学文学部論叢』140号)としてまとめた。具体的には、文例として収録されている手紙に名前が見える俳人たちの経歴、またその内容を調査し、近世後期の俳人たちの交遊のあり方について検討を加え、俳人たちの交遊のあり方が、たとえば歌人など、他の文芸ジャンルにおける交遊のあり方にも影響を与えていた可能性を指摘するに至った。なお、「俳人の手紙文化」については、これまで得られた知見を「出雲俳諧史と大社俳壇」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』(いずれも財団叢書・第5号)未刊、校正中)にも活かすことができた。

以上、近世中期から後期に至る「手紙文化」「伝書文化」「批点文化」の具体的なあり方を明らかにし、俳諧が「人を結びつける文化」として機能していたことを、ある程度明確に示すことができた。以上から得られた知見は、これまで比較的研究が手薄であった近世後期の俳諧に関する、あらたな研究の糸口となったと考えている。

すなわち、近世後期の地方俳人たちが、京都の宗匠たちと月次句合の評を依頼することによって、継続的な関係を結んでいたという見通しを得ることができたのである。そのため、化政期の月次句合に関して、以下2点の新たな研究課題が浮上することとなった。1. 享保期以来続いた都市俳諧・地方俳諧という俳壇の枠組が崩れ、それぞれ月次句合に解消されていくこと、2. その月次句合が地方の俳人と都市の宗匠を結びつける機能を果たしていたこと、である。つまり、化政期を境にして、俳壇の枠組や俳人たちの意識が大きく変化するという問題である。本研究は、「文化」的な価値観で俳諧史を見直すことを目的としたが、この見通しを得たことで、文化として俳諧を再検討する方法の確立と定着が一步進んだと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

伊藤善隆「文東編『俳諧鑑草』」、『湘北紀要』、査読無、39号、2018、一五-二三

伊藤善隆「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(五) 手銭記念館所蔵俳諧資料(一〇)」、『湘北紀要』、査読無、39号、2018、一一-一四
伊藤善隆「豊原重軌著『百華辨』」、『立正大学大学院紀要』、査読有、第34号、2018、三一-五二

伊藤善隆「宗因・昌程点「重長・曲肱両吟百韻」」、『早稲田大学図書館紀要』、査読無、第65号、2018、33-45

伊藤善隆「百蘿俳文集『さりつ文集』 手銭記念館所蔵俳諧資料(九)」、『山陰研究』、査読無、第10号、2017、四九-五九

伊藤善隆「明治・大正期の点印 汽車や気球、喇叭や兵士の図案」、『太平余興』、査読無、第一集、2017、口絵2・13-24

伊藤善隆「大社の俳人にみる師弟関係『岡崎日記』前後」、『日本文学』、査読無、第66巻10号、2017、2-12

田中道雄・田坂英俊・玉城司・中森康之・伊藤善隆「翻刻 方壺宛て蝶夢書簡五十通(下) 付「竹村方壺雑集」に収める蝶夢諸資料」、『ピブリア』、査読無、No.147、2017、58-81

伊藤善隆「蒼虬発句「我たてる」の解釈をめぐって」、『立正大学国語国文』、査読無、第55号、2017、92-100

伊藤善隆「俳諧手鑑 ふぐるま集」に見る近世俳人の手紙文化」、『立正大学文学部論叢』、査読有、第140号、2017、99-119

伊藤善隆「雲裡坊著『答問書』」、『湘北紀要』、査読無、38号、2017、一七-三四

伊藤善隆「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(四) 手銭記念館所蔵俳諧資料(八)」、『湘北紀要』、査読無、38号、2017、一一-一六
伊藤善隆「椎の本花叔編『椎のもと』 手銭記念館所蔵俳諧資料(七)」、『山陰研究』、査読無、第9号、2016、五三-六八(166-151)

伊藤善隆・田坂英俊・玉城司・中森康之・伊藤善隆「翻刻 方壺宛て蝶夢書簡五十通(上) 付「竹村方壺雑集」に収める蝶夢諸資料」、『ピブリア』、査読無、No.146、2016、24-49

伊藤善隆「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(三) 手銭記念館所蔵俳諧資料(六)」、『湘北紀要』、査読無、37号、2016、一一-四一

伊藤善隆「翻刻『寛延三庚午歳旦 新花』 寛延三年平砂歳旦」、『湘北紀要』、査読無、37号、2016、一一-〇

伊藤善隆「教材としての近世文学の可能性 地域の文化を理解する手掛かりとして」、『早稲田大学国語教育研究』、査読無、第36集、2016、16-22

伊藤善隆「翻刻・影印『俚諺俳画賛繪巻』 仙鶴画、周竹・園女・秋色・敬雨ら賛」、『早稲田大学図書館紀要』、査読無、第63号、2016、1-10

伊藤善隆「畔李と白頭 熊谷白頭の前号をめぐって」、『交錯する比較文化学 日本比較文化学会関東支部30周年記念論集』、査

読有、2016、339-322

伊藤善隆「衝冠斎有秀追善集『追善華壘粟』手銭記念館所蔵俳諧資料(五)」、『山陰研究』、査読無、第8号、2015、五一-六一

⑲伊藤善隆「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二) 手銭記念館所蔵俳諧資料(四)」、『湘北紀要』、査読無、36号、2015、二五-五八

⑳伊藤善隆「翻刻『執筆巻』」、『調査研究報告』、査読無、第35号、2015、49-71

㉑伊藤善隆「俳諧資料の特性 「近世における蔵書形成と文芸享受」という視点から」、『調査研究報告』、査読無、第35号、2015、27-38

㉒田中則雄・久保田啓一・芦田耕一・伊藤善隆・佐々木杏里「シンポジウム「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～」パネルディスカッション」、『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業 平成26年度 出雲文化活用プロジェクト実施報告書』、査読無、2015、50-71

㉓伊藤善隆「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」、『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業 平成26年度 出雲文化活用プロジェクト実施報告書』、査読無、2015、38-47

㉔伊藤善隆「百蘿追善集『あきのせみ』 手銭記念館所蔵俳諧資料(三)」、『山陰研究』、査読無、第7号、2014、五三-六六

〔学会発表〕(計14件)

伊藤善隆(講演)「俳人の紀行」、出雲文化活用プロジェクト「連続講演会 江戸を学ぶ 第三回」、2018

伊藤善隆(口頭発表)「桃隣舎文辰著『池西言水四季独吟評釈』』について 近世後期における元禄俳諧評釈」、『在外絵入り本を中心とする書誌・出版・解釈の総合的研究』共同研究会、2017

伊藤善隆(講演)「俳諧史上の其角の位置」、平成28年度江東区芭蕉記念館冬季文学講習会「其角と江戸俳壇」、2017

伊藤善隆(講演)「出雲俳壇史の中の大社俳壇の人々」、『いずも財団公開講座 第期(平成28年度)「主題:出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動」』、2016

伊藤善隆(シンポジウム)「雲橋社と蝶夢」、日本図書館文化史研究会二〇一六年度研究集会 シンポジウム「幕末の公開文庫」、2016

伊藤善隆(口頭発表)「近世前期詩作法書寸見」、『日本の近世における中国漢詩文の受容 三体詩・古文真宝の出版を中心に』公開研究会、2016

伊藤善隆(講演)「『鶯』の芭蕉付句をめぐる」、『大垣市立図書館蔵「木因写『鶯の巻』を中心に』、連続講座 おおがき芭蕉大学、2016

伊藤善隆(口頭発表)「俳諧と絵画 絵俳書・一枚摺・俳画賛」、『平成28年度立正大学国語国文学会前期大会、2016

伊藤善隆(口頭発表)「近世俳人の手紙文化と『俳諧手鑑 ふぐるま集』」、『立正大学人文科学研究所新任教員発表会、2016

伊藤善隆(口頭発表)「『たまひろひ』と『山城名勝風月集』 絵俳書の板木再利用」、『在外絵入り本を中心とする書誌・出版・解釈の総合的研究』共同研究会、2015

伊藤善隆(シンポジウム)「江戸力～手銭家蔵書からみる出雲の文芸～」、『出雲文化活用プロジェクト「シンポジウム 江戸力～手銭家蔵書からみる出雲の文芸～」』、2014

伊藤善隆(講演)「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」、『出雲文化活用プロジェクト「特別企画展 江戸力 手銭家蔵書から見る出雲の文芸」連続講座第三回、2014

伊藤善隆(シンポジウム)「八戸藩主南部信房(畔李)の俳諧活動」、『シンポジウム 藩主の交遊 和歌・俳諧がむすぶ人と地域』、2014

伊藤善隆(シンポジウム)「俳諧資料の特性 「近世における蔵書形成と文芸享受」という視点から」、『平成26年度国文学文献資料調査員会議 調査収集シンポジウム、2014

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

伊藤善隆「俳画の魅力(三十二) 大黒庵奇淵「月待て」自画賛」、『風』、Vol.35、2018、6-7

伊藤善隆「俳画の魅力(三十一) 一具庵一具「番雁や」自画賛」、『風』、Vol.34、2017、20-21

伊藤善隆「俳画の魅力(三十) 蝶夢賛 鼠画「まどゐして」六歌仙図」、『風』、Vol.33、2017、32-33

伊藤善隆「俳画の魅力(二十九) 青蘿」は

なの香や」自画賛」、『風』、Vol.32、2017、28-29
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十八) 立圃「非情だに」自画賛」、『風』、Vol.31、2017、18-19
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十七) 半時庵淡々「いきの松」自画賛」、『風』、Vol.30、2016、20-21
 伊藤善隆「隆盛寺文庫の俳諧資料」、『元政上人と隆盛寺』、2016、117-121
 伊藤善隆「作品解説」、『俳画と俳味画』、2016、6-27、30-87
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十六) 楼川賛田女画「山やさく」画賛」、『風』、Vol.29、2016、10-11
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十五) 蓼太賛東甫画「五月雨や」画賛」、『風』、Vol.28、2016、24-25
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十四) 康工「息かけて」自画賛」、『風』、Vol.27、2016、24-25
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十三) 蒼虬「我たてる」自画賛」、『風』、Vol.26、2015、24-25
 伊藤善隆「10万石の伝来品 国文研調査から 点印譜」、『愛媛新聞』2015年9月11日版、2015年9月11日版、2015、
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十二) 岩波其残「豊年の…」自画賛」、『風』、Vol.25、2015、46-47
 伊藤善隆「夢は枯野をかけ廻る 芭蕉入門」、『墨』、2015 5・6月号 第四十卷第三号(通卷二三四号)、2015、12-15
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十一) 麦林舎乙由「涼しさを」自画賛」、『風』、Vol.24、2015、24-25
 伊藤善隆「俳画の魅力(二十) 国甫賛・雪旦画「みな真向」初日の出図」、『風』、Vol.23、2015、12-13
 伊藤善隆「俳画の魅力(十九) 魚大画 芭蕉涅槃図」、『風』、Vol.22、2014、32-33
 伊藤善隆「俳画の魅力(十八) 樽良 月にうつり自画賛」、『風』、Vol.21、2014、24-25

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 善隆 (ITO, Yoshitaka)
 立正大学・文学部・准教授
 研究者番号：30287940

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

稲葉 有祐 (YUSUKE, Inaba)